

ゆめを もって 沖中重雄

朝から 雨が パラパラと ふって いました。けれども、ぼくは 町たんけんに 行きまし
た。

地いきの おばさんが じん社の せつ明をして くれました。じん社の よこには 大きな
石が あります。なんだろうと ぼくが 石に 書かれている 字を 見て いると、おばさん
が、

「夢(ゆめ)と 書いて あるんやで。」
と教えて くれました。

ゆめと 聞いて ぼくは 大すきな サッカーが うかびました。

「この 字を 書いた 沖中重雄先生はな、おいしゃさんになつて、人の やくに 立ちたい
と 一生けんめい べん強した 人なんや。」

ぼくは サッカーチームに 入つて います。でも、ドリブルや シュートが なかなか う
まく できない ことを 思い出し、下を むいてしまいました。

「どないしたん。沖中先生は、つらい ことや うまく いかへん ことが たくさん あつ
たんやつて。でも、毎日 がんばったんやつて。がんばる ことが ゆめを かなえる こ
とに つながったんやね。」

「がんばる ことが。」

ぼくが 言つと、おばさんは にこにこしながら

「ゆめつて すてきやね。」

と 言いました。

「そつか、ゆめか。」

空を 見上げると、きれいな にじが かかっています。